

説明的文章教材の分析方法に関する研究

——表現の類比化と問題解決の読みとの関係——

植 山 俊 宏

1. 説明的文章の読みの駆動力としての問題解決

(1) 説明的文章の学習意欲・読みの意欲の現状

これまでの説明的文章学習は、おおむね説明的文章という一定量の情報をいかに合理的に処理するかというところに主眼が置かれてきた。平たく言えば、説明的文章の成果として情報処理の結果を求めてきたということになる。つまり、要点、要約、要旨、論旨という情報の縮約が成果と見なされてきたのである。

優れた説明的文章の読者・学習者は、この情報処理能力に秀でた者という評価がなされてきた。受験学力をまつまでもなく、この情報処理能力は、社会生活力として重視され、単なる学校知という位置づけではなかった。多量の情報を処理する力は社会的に大きな意味を持つからである。

ところが、近年、単なる情報処理だけではなく、情報価値を判断する力、情報を評価する力も重視されるようになってきた。これがPIISA型読解力に直結する説明的文章の学力

ということになる。2003年のPIISA調査の結果が思わしくなく、いわゆるPIISAショックに見舞われたことも記憶に鮮明なところである。しかしながら、教育行政主導の建て直し策により、2010年以降、V字回復的な調査結果が得られるようになっていく。情報評価、情報産出という視点からの新たな学力が形成され始めていることは認めることができる。

このように外在的な要因から見た説明的文章学習の功罪はいくつか指摘できる。ただし、このような状況は、学力を測定する、調査する側からの評価によるものであり、肝心の学習者の自力的な読みの能力そのものを保障するところまで連結しうるものではなかった。

相変わらずといっているほど、実践現場では、教師も学習者も苦しんでいる状況にあることは間違いない。学習意欲、読みの意欲、読みの応用力という面からすると、過去の低迷していた時期と比べてさほど大きな変化は見られない。自立した読者の姿はほぼ見受けることができない。これを文学作

品と比較して、内容的な興味が持ちにくいという単純な理由に帰することは難しい。やはり、どこかに根本的な原因があると考へなければならぬであらう。

(2) 読み進める力としての読みの駆動力

読みは駆動するものであるという考へ方は、比較的新しい。近年、山元隆春や寺田守らにより、文学作品を読み進める力に関する研究が進められている。まず、山元は、次のように述べている。

学習者を行為に誘ったその先の過程をどのように組み立てていくのかということが重要な課題でありつづけてきたわけであるが、そのことに十分な結論が出されたわけではない。

確かに、戦後日本の国語教育は、学習者を読み行為に誘い、その環境を整えることに腐心し、一定の成果を挙げってきた。しかし、その先の過程の組み立て方、過程の先にある成果の実感させ方について、十分に突き詰められているわけではないのである。

寺田は、次のように言う。

固有の経験や価値観を持つ読者が文学テキストに働きか

けることで読むという行為が成立する、という読者とテキストの交流に力の根源を求める考へ方が生まれてくる。(中略)だが、読者とテキストの交流という枠組みは、読むという行為が大きく変容し、推進する局面を十分に説明することができない。

寺田は、読みの場作りそのものが、読みを推進する局面を順調に招くわけではないと指摘する。この読みを推進する力は、従来の取り組みや理論では説明がつきにくいということになる。

(3) 説明的文章の読みにおける問題解決の現状

説明的文章の読みにおいて問題の解決を図るという考へ方は、さほど新しくはない。むしろ、学習者の自主的な読みの課題作りが主流になっている現状から考えると旧聞に属するといってもよい。説明的文章の場合は、文学作品とは異なり、単元の最初に「初発の感想」を重視しない。読みの動機付けのレベルで一定の「初発の感想」を出させ、意欲を喚起することはあるが、基本は、「初発」の疑問である。「初発」の疑問を練り上げ、読みの課題としていく。これを学級集団全体で共有できるように図り、大きな学習目標として設定するの

である。これは、説明的文章の読みの生産性という点から見ると、画期的な方法であり、一定の成果を挙げている。

だが、この方法が説明的文章の読みの自立、自立した読者育成として機能しているかという点と、どうしても単元内、教材内の課題解決にとどまってしまう、新たな生産を生み出すところまでには至らない。もちろん、説明的文章の作文学習という意味では、それなりの成果は見られるが、それも単元内と考えると、それ以上の成果は乏しいということになる。

説明的文章の読みにおける問題解決の主導権ということを考えてみる。読みという行為においては、読者に主導権があるというのが自然な考え方であろう。しかし、どの程度の主導権があると考えるべきなのだろうか。

説明的文章の機能を一定の情報提供を元にした論理の提示と考えると、その情報の受容とその構成による論理は、比較的容易に読者の手に入るように見られる。実際、説明的文章の読みは、「読みとり」が終わった後、作業的にこの情報と論理の確認を中心に進められている。ここに合理性が認められるし、また単調さも否めないところである。説明的文章の機能とは、このような程度のものなのであろうか。³⁾

(4) 問題解決機能をもつ説明的文章

説明的文章自体に一定の問題解決機能があると考えことは、実はさほど奇異なことではない。単なる課題提示型の説明的文章が問題解決過程をもち、末尾で解決を示すという単純な話ではない。読者に対して、何かの問題を解き明かしてくれるもの、それが説明的文章であると考えられる。すべての説明的文章が問題解決機能を持つと考えるべきなのである。では、課題提示と解決が明示的に行われる課題提示型以外の説明的文章はどのように考えればいいのか。このことも含めて、考察していく。

2. 説明的文章の読みにおける問題解決と思考過程

(1) 思考の長大化・重厚化

説明的文章の読みにおいて、学習者が積極性を見せ、主体的、自立的に問題解決を行っていったとしたら、実践的障害も何も生まれない。問題解決に主体的・自立的な思考が発揮できないから大きな問題となるのである。

実際上、説明的文章を読んで、課題(問題)を見いだし、解決の過程との照合を行い、結果の検証ができるという、長

大で、重厚な思考ができる学習者は数少ないといつてよい。学力の高位層だけで授業を進めるということになれば、このような授業は実現可能であろうが、その実現された問題解決過程に、学力の厳しい層が関わっていくことは難しい。つまり、目の前で問題解決が行われるのをじっと見ていたとしても、学力は形成されないのである。

このような思考力は、理想である。説明的文章の学習においては、もっと平易で、実現可能な思考力を設定する必要がある。換言すれば、長大でなく、重厚でもない思考力を説明的文章の読みの授業で発揮させ、問題解決の結果を出すことが求められるのである。長大でなく、重厚でないということは、学習者の読みを自立的に駆動させる一つの条件となる。

(2) 説明的文章自体がもつ問題解決機能の活用

説明的文章は、説明という点において、論理という点において、一定の規則性をもつ。

よく知られているのが、段落冒頭の記述である。順序性をもつ展開の場合は、いわゆるナンバーリングが行われている。これは明示的なものが多いので、学習方法の一つとして確立している。その意味で自立的な読みに寄与する部分も認めら

れる。ただ、段落冒頭のナンバーだけで文章全体の読みが駆動できるわけではない。

また文章冒頭に話題提示的に「いろいろな」として、例示の多様性を掲げる表現があれば、文章末尾に「このように」という集約の働きをもつ対応的な表現が来ることも周知のことであり、これも学習方法として一定の確立を見ている。だが、こちらも文章全体の自立的な読みを支えるほど大きな機能を持つてはいない。

これらの説明的文章の表現的な特徴をもつと広げてとらえることはできないだろうか。説明的文章の表現的な特徴を一定の規則性・傾向でとらえ、それを問題解決過程と連結できれば、思考の長大化・重大化に陥らなくてすむ。学力の高低差の授業への影響も軽減できることが期待される。

(3) 「連鎖論」の導入

永野賢は、1959年「文章論的読解指導」を唱えた。その後、曲折を経て、1986年「連鎖論」を提示するに至った。この完成過程は、単純ではなく、諸理論がその生成過程、国語教育への応用過程に関わっているが、その内実は、本稿の目的ではないので、省略する。ここでは、完成形を基に考

察を進める。

文章論は、当初は連接という考え方を基軸にしていた。文の前と後との関係をとらえ、説明していく方法である。この方法は、精度という点ではかなり高いものをもつが、文章全体の把握という面からすると、膨大といつていいほどの作業量を要する。情報処理に重点を置いていた初期の説明的文章指導論においては、「正確さ」という点で大きな成果を上げている。しかし、作業量とその生産性の自覚の低さは、説明的文章の学習意欲の低下を招いた。文章全体の通説後、段落単位、文単位に前後の関係を考えていく授業方法は、説明的文章の授業のスタンダードとして主流を占めたが、教師、学習者ともに意欲の低下に苦しまれることになった。

「連鎖論」は、文章全体の呼応・対応の機能（陳述機能）に着目し、一定の規則性を見いだす方法である。主語の連鎖、文末の連鎖、主要語句の連鎖という3視点を中心とする。

①主語の連鎖

主語の連鎖は、段落単位で主語の切り替え・発展・詳細化を確認する方法である。小学校低学年の説明的文章の場合は、主語は大きく変化しない。例えば、「どうぶつの赤ちゃん」（光

村図書1年下）の場合、冒頭の課題提示の段落以外の主語は、「ライオンの赤ちゃん」が3段落、「しまうまの赤ちゃん」が3段落であり、見事に統括されている。しかし、学年が進行するにつれて、説明的文章の内容が複雑化し、それに伴い、主語にも変化が現れる。主語の連鎖に着目すれば、何が書いてあるかの話題そのものは見失うことはない。日本語の場合、段落内では一度提示された主語は自明のこととして後続部分では省略されることが多く、学力の厳しさによって読みの混乱を生じさせることがある。授業方法として、さらに活用されるべき方法といえる。

②文末の連鎖

文末の連鎖は、主語の連鎖ほど明確ではない。肯定、否定のレベルの文末の確認はよく行われるが、文末によってどの程度の決定を示そうしているのかという点の吟味は、授業方法として一般化していない。例えば、「水の東西」（高校一年の多くの国語総合教科書に採録）におけるなぜ日本に噴水が少ないのかを説明する第8段落の文末を見ると、「こともあろうだろう」、「ことも考えられる」、「ように思われる」、「なかったであろう」と続く。明らかに理由の説明に消極的であ

ることが受け取れる。つまり、この段落は、文章の論述の目的とは離れていることを示しているのである。連鎖論的な着目、一定の規則性・傾向がとらえられるとこのような判断が成立する。

近年、実践現場で着目されているのが、文法用語的という「のだ」文である。「のです」、「のである」、「のだ」に着目し、ここに筆者の論理の重点があるというところである。実践現場的な表現として、「論理の旗が立っている」とか、「論理の力こぶがある」などという言い回しが用いられている。少なくとも、小学校・中学校の国語教科書の説明的文章では、顕著な規則性・傾向がとらえられる。例えば、「たんぼのちえ」(光村図書2年上)の場合、「のです」は、4ヶ所出現する。「…たねに、たくさんのおいようをおくっているのです」、「…たねを、ふわふわととばすのです」、「たねをちらして、あたらしいなかまをふやしていくのです」であり、いずれも「たね」という「ちえ」の目的対象と連結して、重点化が行われていることが分かる。このように文末の連鎖と文章全体の論理との関係が明確に説明できるようになれば、精細な読みとは別の観点で読みを合理的に整理することが可能になる。ただし、現状では、い

くつかの教材について指摘や説明が行われている状況であり、方法として一般化されるまでには至っていない。

③ 語句の連鎖

永野は、これを「主要語句の連鎖」と呼んだ。説明的文章が大量の情報、それが大量の語句として現されている以上、「主要」という限定をかけなければ、作業量が膨大になる。しかし、「主要」というのは誰が判断するのか。授業方法として、教師の判断・指定と言うことはあるであろうが、それは自立した読者の育成にはつながらない。そうすると、その「主要」の判断を学習者に求めることになる。せっかく、文章の連鎖的な関係に着目し、その合理性を重視し、読みを整理しようとしているのに、学習者の思考を求め、その語句が「主要」か否かを決定させるとしたら、思考の長大化・重厚化に陥る危険性が生じる。確かに内容をとらえずして、表現の規則性・傾向を見いだすとしたら、それは不自然な方法といわざるを得ない。読まなくても分かるということを唱えているに等しいからである。読み取ったことを整理していく方法とすると考えるのが一般的なすじみちということになる。

この「主要」という概念のとらえ方、方法化は難しい問題

である。

④問題解決の手がかりを示す語句の連鎖

問題解決の過程が説明的文章にある程度明確に示されているとしたら、その明確さを導き出してくるのは、主語、文末、そして語句の連鎖の把握であろう。この「語句」の連鎖を問題解決上の主要な基点に見いだすことができるなら、説明的文章の読みは整理しやすくなるし、授業方法への応用も容易になると考えられる。

単純に理論化できるほど問題は小さくないが、個別の教材の分析において、一定の説明が成立し、それを積み上げていくことができるか実現が可能になるであろう。また語句の連鎖に学年間の系統が認められれば、これまで系統が不明瞭で学習の連携が不足していた国語科の学習にも一つの系統の軸が立てられることになる。

3. 「言葉がつなぐ世界遺産」の連鎖論的分析

(1)「言葉がつなぐ世界遺産」の内容的な特徴

内容的には、日光の社寺群が世界遺産に登録された際に、

「審査に訪れたイコモスの専門家」たちが、「建造物の保存や修復方法」に驚いたことを説明している。73文、23段落で構成されており、比較的分量のある説明的文章である。事例の例示を中心とした説明であるが、会話・談話が織り込まれる手法がとらえており、やや特異な説明のスタイルといえることができる。また図面の写真も示されており、文字情報と対応させながら読ませることが意図されている。

(2)問題解決過程の示し方

明示的には、一つの大問題（課題）の下に二つの中間問題（課題）が設定されている。この中間問題を説明することで大問題の解明としている。文章全体として、明快な問題解決過程を示している。

(3)非明示的な問題の提示とその解決

①非明示的な問題解決とレトリックの関係

本稿で注目したいのは、非明示的な問題解決過程である。説明的文章は、「説明」を機能としているが、内容面から見れば、読者との距離が前提となっている。つまり、読者が知らないこと、よく分かっていないことを「説明」すること

読者との関係を結ぶ。その際、単に「説明」に終始することでは、読者は「距離」を縮めようとはしない。場合によっては、読みを中止することも想定される。したがって、読者を引きつけるための手法が用いられることになる。いわゆるレトリックと呼ばれるものである。

レトリックは、さまざまな機能があるし、また規模も多様である。ここでは、そのレトリックの機能の分析を行わないことにし、文章の分析上、発見・把握できるものを考察するに留める。とりわけ問題解決過程の明確化・強調の機能としてのレトリックに着目することとする。

レトリックが読者に働きかける積極的な作用については、これまでも多くの指摘がなされてきた。しかし、レトリックと問題解決との連携させる視点は稀といってもよい。レトリックに問題設定、問題提示、問題解決の基点を明確にする機能があるとすれば、この二つの機能の連動は可能になると見込まれる。

非明示的に設定されている問題とその解決過程をとらえ、取り出すことは、説明的文章の読みの問題解決過程を促進することになる。ひいては、非明示的な問題解決過程を取り出す方法が習得できれば、自立的な読みが可能になると思われる。

る。つまり、読みの駆動力として作用することが期待できるのである。

「言葉がつなぐ世界遺産」では、非明示的な問題解決に着目し、その部分に用いられている表現上の特徴を分析することにした。問題解決の範囲はさまざまであり、前後数文で問題解決が行われることもあれば、文章全体で問題を解決することもある。いずれにしても「連鎖論」的に表現の呼応・対応を見いだすことでとらえることができる。

非明示的な問題解決過程に関して、その基点に関わる表現は総括すると、おおむねレトリカルに表現されているといえる。詳細な分析については、別表「資料」「言葉がつなぐ世界遺産」に見られる問題解決と表現の類比の関係」として示した。ここでは、特徴的な例を取り上げ、考察する。

②文章全体に関わる非明示的な問題解決 ○例1

（問題） 題名「言葉がつなぐ世界遺産」
（解決） 第73文「こうした思いの籠もった言葉が、時間を超えて修復記録となり、技術を伝え、日光の社寺に世界遺産の輝きを与えているのである」

問題設定として示されている「言葉がつなぐ」について詳細な記述を行い、解明とされていること、また「世界遺産」が「世界遺産に輝きを与えているのである」と価値付けが行われ、解明結果が出されていることが認められる。これは、明示的な問題解決ではない。

○例2

〔問題〕第2文「この絢爛たる社寺群」

〔解決〕第73文「日光の社寺に世界遺産の輝きを与えている」解決部分は、例1と同じ箇所だが、「絢爛」が、実は問題解決がなされた上でもたらされた「輝き」であることが示されている。特に「絢爛たる」は、読者と距離のある表現であり、読者になぜこのような大げさな用語を用いたのかという疑問を抱かせる問題提起の機能を持つていることも指摘できる。

○例3

〔問題〕第31文「現在は、明治期以降に描かれたもの数枚が、残されている」

〔解決〕第71文「先人から受け継いだ見取り図を使って、……仕事ができることは、本当にうれしいことです」

「残されている」ものが、「現在」どのように機能している

かが、直接話法の会話文によって示されている。明快な問題解決であるとともに、「現在」における価値付けも行われていて、解決を拡充する働きももっている。この直接話法の使用はレトリック表現とみることができる。

③部分で機能する非明示的な問題解決

○例4

〔問題〕第49文「それにも増して技術の伝承が難しい」

〔解決〕第51文「日光社寺保存会の技術者」、「まるで口移しのように彩色技術の詳細を伝え」

「伝承の難し」さの解決として、「保存会」があること、「口移しのように……技術の詳細を伝え」ていることが示される。このような「日光社寺保存会」という団体の存在が固有名詞として提示されること、「口移し」という比喩的な表現が用いられていることは、レトリック表現ということができる。

○例5

〔問題〕第57文「こうした技術は、マニュアルだけでは伝えきれない」

〔解決〕第63文「手塚さんが耳を傾ける姿があった」・第64文「自分の肌でつかんで、初めてできるようになる」

「伝えきれない」という問題に対して、「耳を傾ける」という動作、「自分の肌で」できるようになる」は、明確な解明といえる。いずれもイメージ想起の機能をもつレトリック表現である。

4. 結論

表現の類比化と問題解決過程との連動について、「言葉がつなぐ世界遺産」という教材を例に分析・考察した。

この教材は、情報の提示による問題解決の説明的文章である。論究的な形式ではなく、一定の課題を設定した後で、情報の提供と組み立てを行いながら、その課題に対する解答を得ていく形式を取る。課題提示・課題解決のような明示的な問題解決過程と、問題的事実を提示し、その解決を図っていく非明示的な問題解決過程の二つの問題解決が行われている。明示的な問題解決は、冒頭の「課題提示」に対する解答を見いだし、その整合性を吟味・納得していくことで成立していく。非明示的な問題解決は、読者のもつ既知の知識・情報や経験（いわゆる社会常識的なもの）を前提として、疑問や違和感、期待などを惹起させて、その解決を図っていく性

質のものである。守備範囲的にも文章中の一定範囲を担うものが多いと考えられる。最終的に修辭的な問題解決を行って、文章全体の読みの問題解決を印象づけるように働きかけている。

表現の類比の特徴を考察する。

「修復記録の蓄積」に関しては、「記録」の反復的な使用は見られず、類比的に「文字」「書き溜める」「書き記す」などの語句を使用するとともに、その価値を「情報」という語句に置き換えて用いている。内容を発展的に価値づけているといえる。

「世代を超えた技術の伝承」に関しては、「技術」は反復的に使用されている。「伝承」については、同語の他に「伝える」「受け継ぐ」「受け渡し」などの語句を類比的に使用している。特に発展的な価値付けは見られない。ただし、実在の人物を登場させ、リアリティを確保する方法を用いており、こちらの手法で説得性を確保していると考えられる。

（本学教授）

（引用文献・参考文献）

（１）山元隆春『文学教育基礎論の構築』淡水社、2005年、pp.137-138

(2) 寺田守「読むという行為を推進する力」溪水社、2012年、pp.5—6

(3) 植山俊宏「類比化による説明的文章の読み—問題解決と表現の連鎖の統合—」「表現研究」第98号、表現学会、2013、pp.70—79

(4) 「学校文法文章論」永野賢・朝倉書店・1959

(5) 永野賢「文書論総説」朝倉書店、1986年、p.332

(6) 植山俊宏「陳述機能に着目した説明的文章教材の結束性に関する研究」「小田迪夫先生古希記念論文集」、大阪国語教育研究会、2008年、pp.184—195

(7) 植山俊宏「文章論的観点による説明的文章の教材研究法」「野地潤家先生卒寿記念論文集」、大阪国語教育研究会、2009年、pp.262—269

(8) 「説明文教材の授業改革論」小田迪夫・明治図書・1986年において早くから提唱が行われている。

(9) 「言葉がつなく世界遺産」(平成24年度「伝え合う言葉中学国語2」教育出版・所収)

資料 「言葉がつなぐ世界遺産」に見られる問題解決と表現の類比の関係

(1) 問題解決と類比の対応表

段	題	1	2
教材本文(数字は文番号)	言葉がつなぐ世界遺産	橋本 典明 ①中禅寺湖と華嚴滝から続く谷筋、その深い森の中に日光の社寺は点在している。②この絢爛たる社寺群が世界遺産となったのは、一九九九年一月のことだった。③登録の対象となったのは、東照宮と二荒山神社、輪王寺の百三棟にのぼる建造物群と、これらを取り巻いて広がる境内や参道、さらには山林などの、いわゆる文化的景観である。④登録面積にして、五十一万平方メートルに及ぶ広範な地域だった。⑤日光の社寺群の中でも中心となる東照宮は、一六一七年に徳川家康をまつるために建てられた。⑥当初は質素な造りであったが、三代将軍家光の時代に、現在の壮麗な社殿が造営された。⑦国宝に	⑥当初は質素な造りであったが、三代将軍家光の時代に、現在の壮麗な社殿が造営された。⑦国宝に
問題解決状況の分析	①「ことばがつなぐ世界遺産」	②「この絢爛たる社寺群」	③「家光の時代に現在の壮麗な社殿が造営された」↓
類比(対比)状況の分析	「ことばがつなぐ」		「壮麗」 「家光の時代」と「現在」
気づき		修辭的な 「首」	「先人」

指定されている陽明門や回廊は、鮮やかな色彩の彫刻で飾られ、装飾芸術としての評価は極めて高い。⑧また、「眠り猫」や「三猿」は、彫刻そのものが傑作中の傑作として知られている。	現在へのつながり。	「現在」 「後世」
⑨世界遺産登録の審査に訪れたイコモスの専門家によって、日光の社寺の現地調査が行われたのは、一九九八年十二月であった。⑩その際、彼らは、建造物の保存や修復方法に対して、そろって舌を巻いたといわれている。	④「何が」の内容と「驚かせ」るだけの理由（解答）の要求。	「色鮮やかな漆や絵の具」
⑪何が、専門家である彼らを驚かせたのだろうか。⑫日光一帯は、年間を通して恵まれたとはいえない、むしろ厳しい自然環境にある。⑬標高千メートルに及ぶ山々の間に位置するため、冬は雪に閉ざされ、夏は多量の雨にみまわれる。⑭雪や雨による湿気の多さは、建物を飾る彫刻を容赦なくむしばんでいく。⑮色鮮やかな漆や絵の具は、歲月を経るうちに剥落し輝きを失っていくのだ。	④「容赦なくむしばんでいく」 ⑤「何が」の内容と「驚かせ」るだけの理由（解答）の要求。	「色鮮やかな漆や絵の具」
⑯そこで、江戸時代初期の創建時から、建物や彫刻を守るために、日光ではシステムとも呼べるような整った方法で、二十年ごとに定期的な修復が連	⑤「システムとも呼べる整った方法」	「剥落し輝きを失っていく」 ★「のだ」 「システムとも呼べる整った方法」

綿と続けられてきた。⑰それが、世界遺産登録のための調査の際に、専門家たちを驚かせた「修復記録の蓄積」と「世代を超えた技術の伝承」だったのである。 ⑱では、専門家たちを驚かせた「修復記録の蓄積」とは、いったいどんなものだったのだろうか。⑲日光社寺文化財保存会の浅尾和年さんに、日光の修復記録の一部を見せていただいた。	った方法」とは何か。 ⑳①(5)…①Ⅱ問題と解答が陳述的に対応。(5)Ⅱ結果の抽象的な提示としての解答。	▼▽「記録」「蓄積」 ▲△「技術」「伝承」 ★「のである」	「現在」
⑲「これが、彫刻の見取り図です。」 ㉑目の前に広げられた図は、想像していたよりも、はるかに大きい。㉒その畳一畳ほどの和紙に描かれた極彩色の絵の中で、身をくねらせ、瞳を輝かせていたのは、一匹の竜だった。㉓実物どおりの大きさ、もちろん彩色も現物の彫刻通りの色合いである。	㉔②「実物通りの大きさ」「彩色も現物の彫刻通り」 ㉕②「余白に書き込まれた細かな筆文字」	▼「実物どおり」 ▼「書き込まれた」 ▼「細かな筆文字」 ▼「描き留める」 △「伝える」	「これが、彫刻の見取り図です」 ※事物(論証)
⑲⑳しかし、細かい技法や微妙な色合いなど			

10	11	
の表現方法は、絵だけで完全に伝えることは困難である。②⑦絵で記すことの難しい情報を、後世の職人が見たときにもわかるよう、丁寧に書き留めていたのである。 ②⑧修復のたびに、担当する職人たちが自らの手で描写し、色彩を施す。②⑨そして、余白には詳細な情報を言葉にして書き記す。③⑩こうして、創建当時から、建築や彫刻の見取り図が描き溜められてきた。③⑪現在は、明治期以降に描かれたもの数千枚が、残されているという。	③②例えば、見取り図の一枚には、東照宮五重塔の軒先に据えられた十二支のとの彫刻が、表情の細部に至るまでこまやかに描かれている。③③その脇には、二十を超える筆文字の指示が書き込まれていた。③④目に開するだけでも、情報は詳細に及んでいる。	③⑤「目 朱ノク、リ」(目の外側の輪郭は、朱色で囲む。) ③⑥「中 白群地二元ヨリ群青ヲフカス」(目の白い部
③②「後世の職人が見たときにもわかるよう、丁寧に書き留めていた」	③②「余白には詳細な情報を言葉にして書き記す」 ③③「現在」の状況 ③①②「明治期以降」の「数千枚が、残されている」	③②「情報」は詳細に及んでいる
▽「難しい情報」 ▼「書き留めていた」 ★「のである」	▽「詳細な情報」 ▼「創建当時から」 ▼「描き溜められてきた」 △「残されている」 ◇「という」	▽「情報は詳細」 ▼「筆文字の指示」
※「先人」	「現在」 ※事物	※事物(論証)

分は、水色地に濃い青で縁をほかす。

③⑥「中 白群地ニ元ヨリ群青ヲフカス」(目の白い部分は、水色地に濃い青で縁をほかす。)

③⑦「ヒトミ 朱土、ク、リ星 墨」(瞳は茶色で塗り、輪郭と中心の部分は黒色で塗る。)

③⑧指示されたとおりの技法と色合いに従えば、完全に元どおりのものを描くことができるという。

③⑨その指示が、職人にとっては何よりも頼りになる修復の手がかりなのだ。

「④⑩例えば、ほかしながら白からグレーに徐々に色を変えていくというような技法がありますが、そうした技法で描かれていることを、ここに書き込んでいきます。④⑪絵の具を何度も塗り重ねて盛り上げ、立体感を出す置き上げという技法などもそうです。④⑫この絵だけですと、平面的な彩色なのか、置き上げなのかわからないわけです。④⑬ですから、これは立体的な模様だということを、情報として書き込まなければならぬのです。」

④⑤「完全にも元どおりのものを描くことができる」

④⑥「何よりも頼りになる修復の手がかり」

④⑦「わからないわけ」だから「情報として書き込まなければならぬ」

④⑧「走り書きは」「先人か

◇「という」

◆「修復の手がかり」

★「のだ」

「例えば」「技法」

▽「情報として」

「ならないのです」

◆「先人から私たちへの」

* 音声(論証)

13	14	15	16
④④ 浅尾さんは、走り書きはまさに先人から私たちへの、そして私たちから未来への受け渡しのための大切な情報なのだと語ってくれた。 ④⑤ 修復のたびに職人たちが描き、現在へ受け継がれてきた見取り図は、建物や彫刻そのものの姿を伝えていくとともに、その技法も後世へと伝えていく重要な先人の教えだったのである。 ④⑥ しかし、どんなにすばらしい見取り図があっても、それをもとにしながら修復できる技術者がいなければ、日光の世界遺産を保存し続けることは困難である。④⑦ それを可能にした「世代を超えた技術の伝承」とは、いったいどんなものなのだろうか。	④⑧ 木造の社寺建築では、建物そのものの修復保全も容易なことではない。④⑨ しかし、それにも増して技術の伝承が難しいとされているのが、装飾芸術である。⑤⑩ 現代では、技術自体が他ではほとんど使われてなくなっていること、継承者が少なくなりつつあることから、修復がいっそう難しいもの	④⑩ 「私たちが未来への」「私たちが未来への受け渡しのための大切な情報」 ⑤① 「細かな筆文字」のあ ⑤② 「見取り図は」「技法も後世へと伝えていく重要な先人の教え」 ある」 △「保存し続ける」 ▲「技術」△「伝承」	⑤③ 「世代を超えた技術の伝承」の内容。 ⑤④ 「技術の伝承が難しい」 ⑤⑤ 「技術自体が」「使われなくなっていること」「継承者が少なくなりつつあること」 ▲「技術者」 ▲「保全」 ▲「技術」 △「伝承」 ▲「技術」 △「継承」

※ 音声（論証）

17	18
社寺文化財保存会の技術者たちが、まるで口移しのように彩色技術の詳細を伝えながら修復を行っている。 52 今まさに修行中という手塚茂幸さんは、彩色を始めて六年めになるという。53 この道四十年近くになる澤田了司さんの指導を受けながら、彫刻の細部に丁寧な色を付けていた。 54 日光では彩色に、岩絵の具や金箔が使われている。55 実に多様に見える日光の彩色だが、実際に使われている絵の具の色は、十種類に満たない。56 微妙に混ぜ合わせ、また置き上げ技法による立体的な光の反射などを利用して、複雑な色彩を生み出しているのである。57 こうした技術は、マニュアルだけでは伝えきれものではない。58 その日の湿度や温度によっても、絵の具を溶く膠のぐあいをきめ細かく変えていく。59 微妙な色合いを確かめながら、彫刻の一つ一つの部分を丁寧に塗っていく。60 実に繊細な技術は、そうした一つ一つ	者」 ③「口移しのように彩色技術の詳細を伝えながら修復」 ③「手塚茂幸さん」「六年め」「この道四十年近くになる澤田了司さんの指導」 ⑥「多様に見える日光の彩色だが」「絵の具の色は、十種類にも満たない」「利用して、複雑な色彩を生み出している」 ⑦「マニュアルだけでは伝えきれ」ない ②③「実に繊細な技術は」「作業を行う中で受け継がれ
▲「彩色技術の詳細」	▲「指導を受けながら」 ◇「という」 ▲「置き上げ技法」 ★「のである」 ▲「こうした技術」 ▲「マニュアルだけでは伝えきれものではない」 ▲「実に繊細な技術」 ▲「受け継がれ」★「のだ」

「現在」

* 音声（論証）

19	20	21
の作業を行う中で受け継がれていくものなのだ。 61 絵の具をどのように溶いていくのか。62 微妙な色合いをどのように出していくのか。63 細部にわたって、師匠である澤田さんが言葉で説明し、手塚さんが耳を傾ける姿があった。	64 「自分の肌でつかんで、初めてできるようなと思います。それまでは、まだまだ修行です。」と、手塚さんは作業の手を止めることなく、そう語った。	65 まずは、今取り組んでいる先人の技から身にかけていく。66 彼らが受け継がなければ失われてしまう技術であるだけに、手塚さんの言葉はとても重みのあるものを感じられた。
ていく」 ㊦③「細部にわたって」「言葉で説明し」「耳を傾ける姿」 ㊦⑥「自分の肌でつかんで、初めてできるようなになる」	㊦⑥「彼らが受け継がなければ失われてしまう技術」	㊦②③「これがただ師弟の間での技術の受け渡しだけではないということ」
△「師匠」「が」「説明し」「耳を傾ける」	◇「そう語った」 ▲△「先人からの技」 △「受け継がなければ」 ▲「技術」 ◆「感じられた」	▲△「師弟間の技術の受け渡し」 △「江戸時代から連綿と技を伝承」「職人の連なりの最後尾」 △「顔を見ることがない後」

* 音声(論証)

22	23
らくは顔を見ることがない後輩たちへと続いていく。70 二人は、こうした長い技術伝承の鎖の一つなのだということを、強く意識しているという。 71 澤田さんは最後に、「先人から受け継いだ見取り図を使って、同じ色を使って仕事ができるということは、本当にうれしいことです。三百年以上も昔の人たちの意気込みを背中に背負って仕事をしているのですから。」と語った。 72 創建以来、どれほどの職人たちが同じ思いを共有してきたことだろう。73 こうした思いの籠もった言葉が、時間を超えて修復記録となり、技術を伝え、日光の社寺に世界遺産の輝きを与えているのである。	伝承の鎖の一つなのだということ」 ㊦(2)㊦「三百年以上も昔の人たちの意気込みを背中に背負って仕事をしている」 ㊦(1)㊦「同じ思いを共有」思いの籠もった言葉」 ㊦(2)「日光の社寺に世界遺産の輝きを与えている」
輩たちへ」▲△「技術伝承の鎖の一つ」◇「という」 △「三百年以上も昔の人たちの意気込みを背中に」◇「と語った」 「創建以来」 「共有」 ▼▽「修復記録」▲△「技術を伝え」★「のである」	* 音声(論証) * 音声(論証) 修辭的な「尾」